

八戸地域における住民の手洗い意識に関する実態調査

A survey of area residents in Hachinohe handwashing consciousness

岩織美保子・小池久美子・三浦みや子

要旨 石鹸と流水による手洗いは、感染予防手段として簡便であるが、洗い残しが多くあることが指摘されている。今回地域での手洗い教室活動の検討のため、手洗いの意識と手洗い行動の傾向を知るために、一般住民に対して手洗い後の洗い残しの状況と、普段の手洗い状況を調査した。その結果、住民の手洗いに対する意識は高かった。洗い残しの多い部位は爪、手掌、指間であった。また幼児や学童は幼稚園等で手洗い指導を受けていることが多かったが、正しい手技が身につけていないことが示唆された。

I. は じ め に

日常生活において手洗いは極めて頻回に繰り返される行為である。食中毒やインフルエンザやノロウイルス感染等の流行に伴って、その重要性が指摘され、手洗いやうがいの励行が啓蒙されている。手洗いは単に洗うということではなく、適切なタイミングと技術が必要である。専門職はもとより、学校や会社等でも感染予防目的で手洗い方法についての指導がなされるようになった¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。感染予防の観点から家庭で行う手洗い時間については、厚生労働省から15秒以上行うよう推奨されている。しかし、流水と石鹸を用いた手

洗いは、洗い残しが多くあることが指摘されている。

手洗い方法を教育し、洗い方が改善された報告もあるが、一方では正しい方法を継続することは難しいという報告もある。

この度地域で住民を対象とした手洗い教室を実施してきたが、短い時間で実施していたため今後の手洗い教室活動方法を検討することが必要と考えた。そこで一般住民を対象に、手洗いトレーニング機械（グリッターバグTM 米国 Brevis Corporation 製造）を使用して調査した洗い残しの状況と、普段の手洗い状況

について質問し収集したデータから、手洗いの意識と手洗い行動の傾向について分析し、

今後の手洗い教室活動の基礎資料とすることを目的とした。

Ⅱ．研 究 方 法

1. 対象

八戸市内で行われている地域住民を対象とした健康まつりや地域交流祭の手洗い教室を訪れ、研究に賛同を得られた方

2. 実施場所

公民館や福祉施設で、手洗い用の流し台が設置されている施設

3. データ収集方法

対象者にグリッターバグローションを塗布し、いつもと同じ様に手洗いを実施してもらった。その後グリッターバグTMで洗い残しを対象者と一緒に観察し、研究者が調査票に記録し、無記名でアンケートに答えてもらった。幼児や学童は、同行者と一緒に実施した。

アンケート内容は ① 性別、年齢 ② 洗い方を知っているか ③ 洗い方の指導を受けたことの有無 ④ 手洗いを心がけているか ⑤ どのような時手洗いをするか ⑥ 手洗いの時間 ⑦ 塗擦式手指消毒剤の使用の有無の7項目とした。

4. 分析方法

アンケート結果は、単純集計し、手洗いの仕方の教育を受けた人と受けていない人で比較した。また洗い残し状況は、手掌は①掌②指間③指先④親指⑤手首の5項目、手背は①甲②指間③爪④親指⑤手首の10箇所、1部位につき1点として集計した。

5. 研究期間

平成23年9月1日～平成24年1月15日

6. 倫理的配慮

健康まつりや地域交流祭実行委員会に「手洗い教室」実施の目的、方法を説明し、承認を得た。「手洗い教室」に訪れた住民に目的と方法を説明して、了解が得られた方の手洗いを実施した。調査票には、参加の自由意志を尊重すること、得られたデータは研究の資料として使用する際には個人が特定されないようコード化して処理し、発表後収集したデータはシュレッターで廃棄することを明記するとともに、口頭でも説明した。調査票は提出をもって同意を得たものとみなし、回収後はボックスに入れて保管した。本研究は、八戸大学・八戸短期大学研究倫理委員会の承認を受けた。

Ⅲ. 結

調査票の回収は225名、有効回答は3歳から86歳までの220名（97.8%）であり、平均年齢32.3歳であった。男女の内訳は、男性49名（22.3%）女性171名（77.7%）。年齢の内訳は、幼児（3～6歳）は29名（13.2%）、学童（7～15歳）は91名（41.4%）、成人（16～64歳）45名（20.5%）、高齢者（65歳以上）55名（25.0%）であった（図1）。

1) アンケート調査の結果

手洗いの方法（図2）を示し、「手洗いの仕方を知っていましたか」に答えた人は、参加者全体では、「知っている」が133名（60.5%）、「知らない」87名（39.5%）であった。幼児と学童では、平均よりも多かった（図3）。

「手洗いの仕方を教えてもらったことがありますか」に答えた人は、全体では「ある」は111名（50.5%）、「ない」は109名（49.5%）であった（図4）。「ある」の割合が50%を超

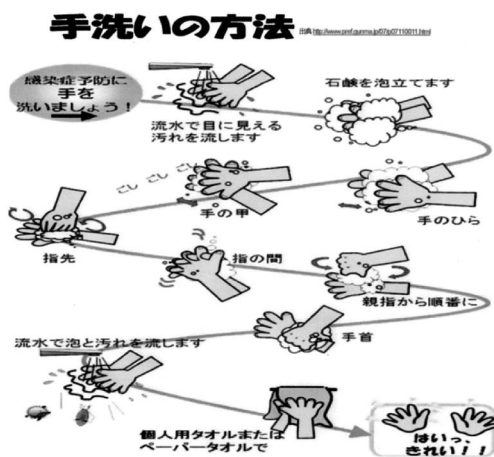


図2. 手洗いの方法

出典：群馬県 HP
(<http://www.pref.gunma.jp/07/p07110011.html>)

果

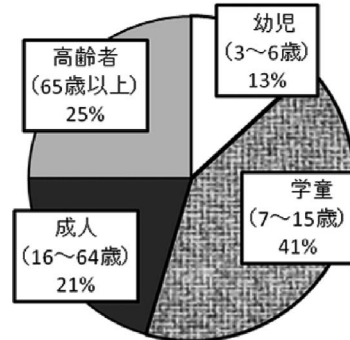


図1. 年齢構成

えているのは幼児と学童であった。「ある」と答えた人に対して、「どこで教えてもらいましたか」の問いでは、一番多かったのは幼児や学童で「幼稚園や保育園」16名、成人や高齢者では「仕事」8名、「テレビやポスター」が7名であった。

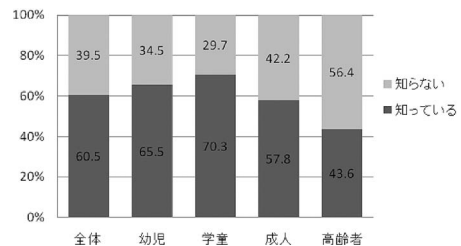


図3. 「手洗いの仕方を知っていますか」の回答

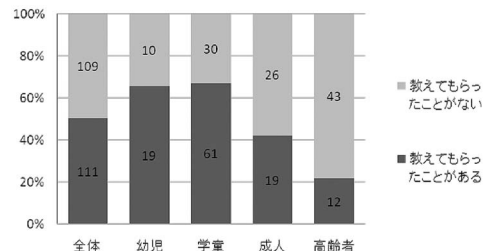


図4. 「手洗いの仕方を教えてもらったことがありますか」の回答

「手洗いをするように心がけていますか」に答えた人は、全体では「いる」179名(81.4%)、「いない」41名(18.6%)であり、すべての年齢層で70%以上であった(図5)。

「どのような時に手洗いをしますか(複数回答可)」に答えた人は、全体では「外出から帰った時」は179名(81.4%)、「トイレの後」は180名(81.8%)、「食事等の飲食前」は130名(59.1%)であった(図6)。「その他」は21名(9.5%)であり、「調理の時」「仕事の後」「掃除の後」「べたついたとき」であった。

「普段の手洗いの時間は、どれくらいですか」に答えた人は、全体では「15秒以内」が95名(43.2%)、「15～30秒」が85名(38.5%)、「30～60秒」20名(9.1%)、「60秒以上」が15名(6.8%)、「その他」は5名(2.3%)であった(図7)。幼児では15秒以内が60%を超えたが、他の年齢層では50%未満であった。

「擦式手指消毒剤を使用していますか」に答えた人は、「いつも使用している」は21名(9.6%)、「時々使用している」は101名(45.9%)、「使用していない」は98名(44.5%)であった(図8)。そのうち「時々使用している」と答えた人の中で、自宅に設置して使用している人は38名(37.6%)、スーパーマーケットや病院の入り口などの設置してある場所で使用している人は59名(58.4%)、その他は4名(4.0%)であった。

2) 洗い残し部位の結果

(1) 洗い残しの状況

洗い残しは220人中、195名(88.6%)にあり、洗い残しがなかったのは25名(11.4%)であった。洗い残しのなかった人には医療関

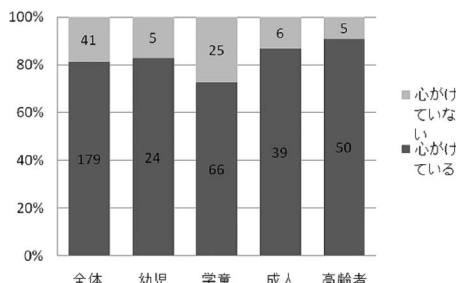


図5. 「手洗いをするように心がけていますか」の回答

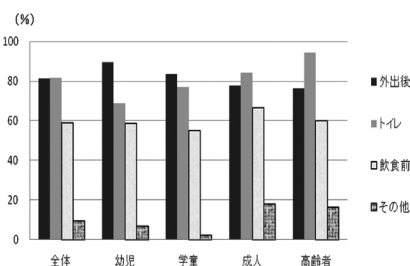


図6. 「どのようなときに手洗いをしますか(複数回答可)」の回答

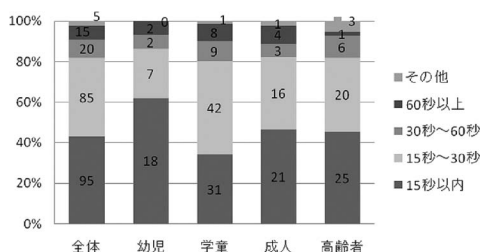


図7. 「普段の手洗いの時間はどれくらいですか」の回答

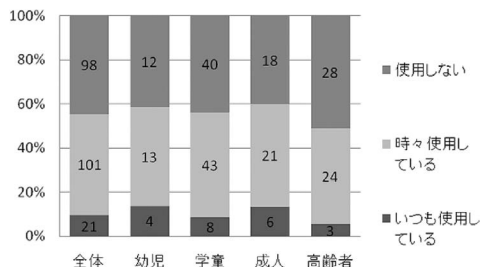


図8. 「擦式消毒剤を使用していますか」の回答

係や食品調理関係の仕事をしている人が含まれていた。洗い残し部位は、述べ796箇所であった。洗い残しが5箇所以下の人は167名（75.9%）、6～10箇所ある人は48名（21.8%）であった。

部位別でみると、手掌は267か所（33.5%）、手背は529か所（66.5%）であった（図9）。手掌では左手が129箇所（48.3%）、右手が138か所（51.6%）の洗い残しがあった。手背では、529か所のうち左手が263（49.7%）、右手が266（50.2%）であった（図10）。

左右の手掌で洗い残しの一番多かった部位は掌で、次に指間であった。また左右の手背の洗い残しの一番多かった部位は爪で、次いで指先であった。

（2）教育を受けた経験の有無による洗い残し状況

幼児の洗い残し状況は、手掌では掌、指間は教育を受けていない人に多かった。他の部位は教育を受けた人に多かった（図11）。

学童の洗い残しは、手掌・手背とも親指が教育を受けていない人に多かった。他の部位は教育を受けた人に洗い残しが多かった（図12）。

成人では、手背の甲が教育を受けた人に洗い残しが高かった。他の部位は教育を受けていない人に洗い残しが多かった（図13）。

高齢者では、手掌の手首は教育を受けた人に多かった。他の部位は教育を受けていない人に洗い残しが多かった（図14）。

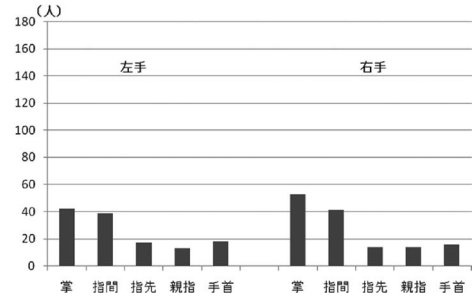


図9. 手掌の洗い残しの数 n=267

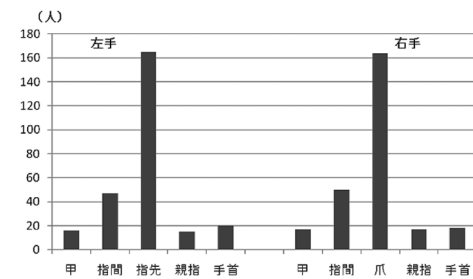


図10. 手背の洗い残しの数 n=529

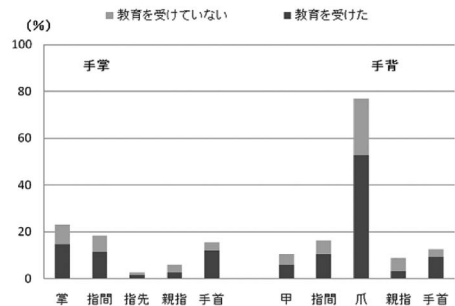


図11. 教育を受けた経験の有無による洗い残し状況 (幼児)

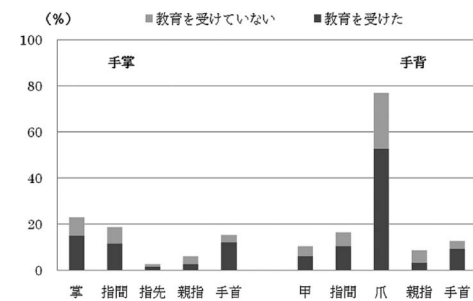


図12. 教育を受けた経験の有無による洗い残し状況 (学童)

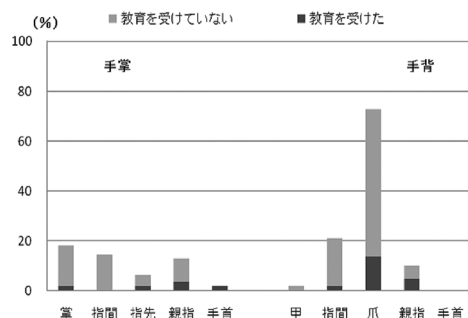


図 13. 教育を受けた経験の有無による洗い残し状況 (成人)

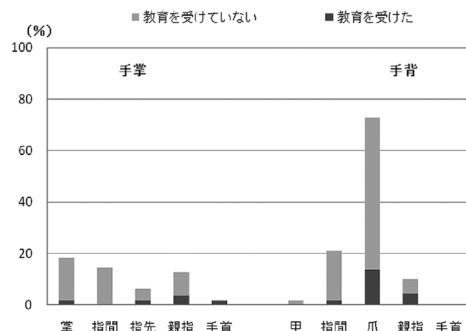


図 14. 教育を受けた経験の有無による洗い残し状況 (高齢者)

IV. 考 察

厚生労働省はインフルエンザ等の感染予防対策として、家庭の場合「最低 15 秒以上」かけて手洗いを行うことを推奨している。またアメリカ疾病対策センター (CDC) も衛生的な手洗いの時間を「15~20 秒」としている。手洗いの目的は、手に付着している微生物を洗い流すことにある。15 秒の手洗いで手に付着している微生物の 1/3~1/4 が減少し、手洗い時間が 30 秒では 1/60~1/600 に減少するといわれている。

今回の調査では、約 8 割の人が手洗いを心掛けるようにしており、手洗い時間が 15 秒以下の人の割合は 43.2%であり、56.8%の人は厚生労働省で推奨している 15 秒以上と回答している。また手洗いのタイミングも、「外出後」「トイレの後」が 80% 以上で、飲食前でも 58% であり、手洗いの必要性に対する意識は高いと考える。またその他で「仕事の後」「べたついた後」「掃除の後」などの回答があり、何かの作業をした後手洗いをすることを意識している回答であった。

また、今回約 5 割の人が擦式消毒剤をいつ

も又は時々使用していた。擦式消毒剤は手洗いができないときや、手洗い後より清潔に保つために使われているが、擦式消毒剤はアルコールを含むものもあり、アレルギーがある場合や子供の場合は注意が必要である。

手洗いの方法に関しては、感染予防の観点から医療機関はもちろんのこと、学校、幼稚園、保育園での講習や啓蒙活動がされている。今回の調査でも約半数の人が手洗いの仕方を教えてもらったことがあると答えている。その中で、幼児や学童は幼稚園や保育園、成人や高齢者では仕事やテレビ等のメディアを通して手洗い方法を知ったと回答している。

このことは、手洗いの必要性は、広く啓蒙されていることを示していると考える。佐藤ら¹⁾は医療福祉従事者、食品を扱う業種でなければ教育を受けるチャンスが少なく、一般住民は感染予防関連の教育のチャンスが少ないことを報告している。

今回、成人や高齢者では教育をうけた人の洗い残しが受けていない人に比較して多かった部位が 1 か所であったのに対し、幼児や学

童は、6～7の部位で教育を受けている人の方が洗い残しが多かった。保育園や幼稚園の中では、手洗いのしつけや習慣として手洗い教育を行っている施設もある。原田⁵⁾は幼児の場合、手洗いは手指の巧緻性との関連が大きく、手をすり合わせるという意識があることが確認されたが、家庭でのしつけと関連していることを報告している。このようなことから、子供の成長に合わせて手洗一手技の教育や、正しく手洗いが行われているかの確認の機会が必要と考える。

今回は教育の方法や頻度は調査していないが、手洗い実施中に「爪には汚れが残しやすい」とか「よくこすり合わせて」ということを話しながら行っている参加者が多く、洗い残しが多い部位やこすり合わせるなどの知識は持っているが、実際に指先や指間のパウダーが洗い流せるほどの手技が身についてい

ないことが考えられる。手技は、定期的に確認しないと実施しているうちに自己流になってしまうことも考えられる。

今回、グリッターバグで洗い残したパウダーを視覚的に確認できたことで、参加者から、より手洗いの必要性を実感した声が聞かれた。手洗い行動を変化させるためには、洗い残しの部位を意識し、注意深い手洗いが必要である。手洗いの手技は、正しい方法を何度も行い、手技が身につくようにしていくことが必要である。

一般住民は、自ら研修や講習に参加しない限りは教育の機会が少ないので、日常生活の中での感染予防のためには一般住民への教育啓蒙活動が大切である。今後、正しい手洗いの方法と洗い残しの確認を繰り返し継続することで、手技が身につくようにしていくことが必要であると考えられる。

V. 結

今回の調査した結果、洗い残しの多かった部位はどの年代でも爪、手掌、指間であった。また、幼児や学童は、幼稚園や保育園などで手洗い指導を受けている子どもが多かったが、正しい手洗いの手技が身についていないことが示唆された。手洗いは感染防止のための有効な手段である。手洗いの必要性に対する意識は高いが、定期的に実際にきちんと洗えているかどうかという確認できる機会が必要と考える。今回は、設定できなかったが、洗い残しに対する参加者の反応や実際の手洗

論

い時間を測定することでより実態が把握できるのではないかと考える。今後の手洗い教室に反映させていきたい。

謝辞

調査に快くご協力くださいました保健推進員、施設の関係者、一般住民の方々に心より感謝申し上げます。また手洗い教室活動にご協力くださいました関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 村田マサミ：グリッターバッグを使用した学生の手洗いに関する意識調査，清泉大学紀要，Vol. 15, 325-336, 2007
- 2) 今関孝子，他：手洗い教育における手洗い小野有効性やコンプライアンスに関する研究，医学薬学，Vol. 30, No. 2, 129-133, 2004
- 3) 松田ひとみ，他：高齢者の入院施設における看護者の手を洗う行為と感染予防意識に関連する要因—アンケート調査による多変量解析から—，日本生理人類学会誌，Vol. 11, No. 1, 35-41, 2006
- 4) 佐藤祐佳，他：障害者への感染予防教育におけるリスクコントロールの在り方，久留米医学会雑誌，Vol. 73, No. 5, 6, 2010
- 5) 原田真澄：幼児の手洗いの技術に関する研究，中国学園紀要，Vol. 3, 97-102, 2004